

歴史を歩く 30

『戦国時代の群像』

第十五話 決戦の兆し



永祿9年(1566年)11月15日、肝付兼統が志布志の地で急逝した。そして、第17代当主肝付良兼が父・兼統に代わって権力を握るようになった。

永祿11年(1568年)伊東義祐は2万の軍勢を率いて、再び飢肥への侵攻を開始した。都城の北郷時久は救援のために飢肥に向かい、飢肥の島津忠親とともに1万3千の軍で伊東軍に備えた。1月26日に合戦の火蓋が切られ、肝付良兼は伊東氏と連合して志布志から兵を進めて、串間市福島に侵攻、飢肥攻めを行っている伊東氏とともに島津忠親、北郷時久を挟み撃ちにした。この戦いで伊東氏・肝付氏は勝利し、忠親の所領である飢肥を伊東義祐に、櫛間を肝付良兼に譲ることで、三十年以上にわたる飢肥・櫛間を巡る抗争に終止符が打たれたのである。そして忠親は都城に隠退し、北郷氏と肝付氏との間で講和を成立させた。こうして、とうとう

日向地方は伊東氏、大隅地方は肝付氏が完全に掌握することになったのである。

この年の12月13日、薩摩では島津氏発展の礎を築き上げた島津忠良がこの世を去った。さらに忠良の嫡男島津貴久もまた父の後を追うかのように元龜2年(1571年)6月23日に死去した。肝付氏と島津氏との長年の対決に決着をつける宿命の戦いは次世代へと引き継がれていったのである。

島津貴久の跡を継いで島津義久が第16代当主となった。家督を継ぐまでに島津氏は大隅と日向を除く南九州を掌握していた。島津氏にとつての積年の思いである日向・大隅・薩摩の三州統一は義久に託されることとなった。

貴久には義久のほかは次男義弘、三男歳久、四男家久の4人の息子がいた。祖父である忠良は、4人の孫について以下のように評価している。「義久は三

州の総大将たるの材徳自ら備わり、義弘は雄武英略を以つて傑出し、歳久は始終の利害を察するの智計並びなく、家久は軍法戦術に妙を得たり。」と。このことは後の4人のエピソードの中にも見出すことができる。

徳川家康は義久に興味があつたらしく、後に義久の戦いぶりを聞いた家康は義久について「想像よりも恐ろしい大将である。」と評価していたという逸話が残されている。関ヶ原の合戦後に島津氏は改易されることなく、本領を安堵という寛大な処置を下されている。

義弘の武勇は、関ヶ原の戦いにおいて、徳川本隊に向けて敵中突破を行った『島津の退き口』で有名であるが、元龜3年(1572年)の『木崎原の戦い』では伊東氏3千の大軍の攻撃に對して、3百の兵で奇襲し、これを打ち破るといふ勇猛振りを発揮している。

歳久もまた、作戦参謀として島津氏の勝利を導いている。後の豊臣秀吉による島津攻めの際、農民から身を興した秀吉を「只者ではない。」と判断し、秀吉との戦は利の無いことを唱えたのは4兄弟でただ一人だった。秀吉と交戦する姿勢をとつた義

久・義弘が後に秀吉に降伏しても、歳久は一人だけ秀吉に徹底的に抵抗し続けた。その結果、秀吉の命による義久の追討を受け、自害した。

島津義久が秀吉に對して有利な講和条件を作り出すため、歳久はあえて自らの命と引き換えに反秀吉派を掲げたとも言われている。

家久は、天正12年(1584年)の九州における島津氏の最大の敵である肥後国龍造寺氏との決戦といわれている沖田噺の戦いを制した人物である。龍造寺隆信の数方に及ぶ大軍を沖田噺という湿地帯に誘い込み、弓鉄砲を用いて両側・前方から挟み撃ちにする高度な戦術で一網打尽にした。この戦いは、島津氏の九州制覇の足がかりと

なった。

以上のように、島津氏は義久以下3人の兄弟によつて、島津氏史上最強の体制が築かれようとしていた。

このような中、肝付良兼は下大隅・垂水の伊地知重興を前衛とし、根占の瀬重長を後衛として、島津義久に備えていた。そして元龜2年(1571)年3月、義久は肝付氏討伐のため伊地知氏に攻撃を仕掛け、さらに5月にも再び侵攻してきた。良兼も自ら兵を進め、島津軍を撃退することができた。

しかしその直後、肝付良兼は37才の若さで病死する。この時から、肝付氏の勢いは急速に衰えていくことになる。(大崎町教育委員会 内村憲和)



▲肝付良兼の墓
(肝付町盛光寺跡内、現在発掘調査中)